

## Chaucer における ‘Gentilesse’ の二つの面\*

安藤光史

## Two Levels of Chaucer’s ‘Gentilesse’

Mitsunobu ANDO

The word ‘gentilesse’ (gentility) Chaucer uses is a word with surprisingly multiple meanings, which is often a key-word to understand his works. But the word, as some critics have pointed out, is difficult to define because of its multiplicity and its ambiguity.

Among his early poems are two ballads treating ‘gentilesse’ as their theme — *Gentilesse* and *The Complaint of Venus*, which show two levels of Chaucer’s ‘gentilesse’: ‘verray gentilesse’ and ‘courtly gentilesse.’ In each case one word ‘gentilesse’ is used as a generic name of various virtues necessary for men, but they are quite different in nature from each other. The former is grounded upon Christianity, and the latter, upon Courtly Love. Sometimes Chaucer uses them vaguely, and sometimes specifically.

*The Wife of Bath’s Tale*, *The Parson’s Tale* and so on offer examples of ‘verray gentilesse,’ and *Troilus and Criseyde*, *The Romaunt of the Rose* and so on, examples of ‘courtly gentilesse.’ Thus, presenting both levels of ‘gentilesse,’ Chaucer appeals to the audience to turn their eyes not on ‘courtly gentilesse,’ however fascinating, but on ‘verray gentilesse.’

## I

Chaucer が、‘gentilesse’及びその派生語である ‘gentil,’ ‘gentilly,’等を多用し、かつ、作品のとこどこで ‘gentilesse’ にまつわる議論を展開するなど、この語に多大な関心を寄せていることはつとに指摘されている。たとえば、*The Canterbury Tales* (以下、*CT* と略記する) ひとつを例にとってみても、第一話、*The Knight’s Tale* が感動のうちに語り終えられると、居合わせた巡礼者達は口々に、‘noble’<sup>1)</sup> storie’ (*Mill Prol*, 311)<sup>2)</sup>であった、と語り手を讃えるのであるし、その直後、泥酔した Miller が、今度は俺の番だとばかりにしゃしゃり出ると、とても ‘noble tale’ は期待できないと見た背後なる Chaucer が、やにわ、

Turne over the leef and chese another tale;  
For he shal fynde ynowe, grete and smale,  
Of storial thyng that toucheth gentilesse.  
(*Mill Prol*, 3177-79)

という意味ありげな弁解ないし忠告をしたりする。あるいは、*The Wife of Bath’s Tale* では、老婆の口から、gentleman とはかくあるべき、という説教が聞かれるのであるし、*The Clerk’s Tale* が終わると、審判役の Host が、‘This is a gentil tale for the nones, / As to my

purpose,’ (*CIT*, 1212d-12f) という寸評を加えたりもする。さらに、物語をする Squire を中断しての Franklin の ‘gentilesse’ 談議、それに続く ‘gentilesse’ の美談は有名であるし、*CT* のしめくりとなる Parson の長い長いありがたい説教の中でもこの ‘gentilesse’ の問題が取り上げられ論じられる。ざっとこんな調子で、‘gentilesse’ の問題は Chaucer の主要なテーマであった<sup>3)</sup>、という Kean 女史の言葉も、決して言い過ぎではないように思われるのである。

しかし、この作家を理解するには重要な語でありながら、非常に多義にわたる含みの多い語であるため<sup>4)</sup>、正確な意味の把握となると今ひとつどこかしい思いのすることも事実である。これは、ひとつには、こういう古い時代には、ひとつひとつの語が独立した意味をア・ブリオリにもっていて、それが作家に意識的に使用されることが少なく、意味はほとんど文脈の意味からの帰納的類推であったという事情にもよるものであるかも知れない<sup>5)</sup>。ただ、幸いなことに、‘gentilesse’ に関しては、Chaucer が、はっきりそれをテーマとする詩をのこしているので、Chaucer 的精神構造の中での ‘gentilesse’ という語の独立の意味があるのではないかと考えられるわけである。本稿は、この一見 elusive とも言える Chaucer の ‘gentilesse’ を、彼の初期の ‘gentilesse’ を扱った二つの短詩 — *Gentilesse* と *The Complaint of Venus*

——を出発点に、その二つの側面を検討することによって、大観しようとするものである。

## II

Chaucer はいくつかの短詩を書いているが、この中に、同じように 'gentillesse' をテーマとしながら、その扱い方の幾分異った二つの詩がある。Moral Balade, *Gentillesse* と *The Complaint of Venus* がそれで、前者については、Chaucer の同時代の詩人 Henry Scogan が "A Moral Balade" と題する自作の詩の中で、Chaucer 作としてこれを全文引用していることから、authenticity が広く認められているし、また、これが同時代に如何に受けとめられたかを知る上にも好都合である。他方、後者は伝詩人 Otes de Granson によって仏語で書かれた三つの ballads の Chaucer による中世英語訳であるが、ここで扱う第一の ballad については、ほとんど翻訳と呼ぶに値しないほどの自由訳というから<sup>6)</sup>、Chaucer の 'gentillesse' の扱い方を検討するには都合がよい。

短詩 *Gentillesse* は次のように始まる。

The firste stok, fader of gentillesse——  
What man that claymeth gentil for to be  
Must folowe his trace, and alle his wittes dresse  
Vertu to sewe, and vyces for to flee.  
(*Gent*, 1-4)

'Gentil' であらんと欲する人は、「始祖」(firste stok) の足跡につき従って、善を求め、悪を避けよ、というのがこの詩の趣旨であるが、一体、この 'firste stok' とは何をさすのだろうか。

この点に関しては、諸説ある所であるが<sup>7)</sup>、Chaucer と同時代の詩人 Henry Scogan は、この詩の趣旨を汲みとった上で、次のような解説を施している。

[My mayster Chaucer] sayde, the fader  
whiche is deed and grave,  
Biquath nothing his vertue with his hous  
Unto his sone; therfore laborious  
Ought ye to be, beseching God, of grace,  
To yeve you might for to be vertuous,  
Through which ye might have part of  
his fayr place.  
(*A Moral Balade*, 67-72)<sup>8)</sup>

即ち、Scogan は神の恩寵を求め、各人が努力することによって、祖先の gentility を学ばなければならないと説い

ているのである。そして、さらに、"Than is god stocke of veruous noblesse." (*A Moral Balade*, 100) と結論するのである。従って、'gentillesse' の源泉は神であって、そこからわれわれは己れの gentility を引き出さなければいけないというのである。

第二連では、神の美徳、即ち、われわれが神から求めるべき美徳のかずかずが列挙されていく。

This firste stok was ful of rightwisnesse,  
Trewē of his word, sobre, pitous, and free,  
Clene of his gost, and loved besinesse,  
Ayeinst the vyce of slouthe, in honestee;  
(*Gent*, 8-11)

即ち、正義、誠、謹直、同情、寛如、魂の清らかさ、勤勉、正直等の美徳が神にはあふれているので、そういう美徳を学べというのである。そして、これらの様々な美徳の総称として、他ならぬ 'gentillesse' の語が当てられていることがわかるのである。Coghill 教授の言葉をかりるなら、これらの美徳は 'facets of a well-cut diamond'<sup>9)</sup> と言うべきものであろう。

さらに第三連では、富(riche)が 'gentillesse' とは相容れぬ悪であることが明言されて、*Gentillesse* の ballad は終わる。

Vyce may wel be heir to old richesse.  
(*Gent*, 15)

この富と 'gentillesse' が相容れぬものであるという考え方が、次に考察する 'gentillesse' の他の一面と決定的に異なる点で、一方の軸をなすものと考えてよい。

では、*The Complaint of Venus* の場合には、'gentillesse' は何如なる概念として扱われているのであろうか。まずは、問題の第一 ballad を一読してみることにしよう。

Ther nys so high comfort to my pleasaunce,  
When that I am in any hevynesse,  
As for to have leyser of remembraunce,  
Upon the manhod and the worthynesse,  
Upon the trouthe and on the stidfastnesse  
Of him whos I am al, while I may dure.  
Ther oghte blame me no creature,  
For every wight preiseth his gentillesse.

In him is bounte, wysdom, governaunce,

Wel more then any mannes wit can gesse;  
 For grace hath wold so ferforth him avaunce  
 That of knyghthod he is parfit richesse.  
 Honour honoureth him for his noblesse;  
 Therto so wel hath formed him Nature  
 That I am his for ever, I him assure;  
 For every wight preyseth his gentillesse.

And notwithstanding al his suffisaunce,  
 His gentil herte is of so gret humblesse  
 To me in word, in werk, in contenance,  
 And me to serve is al his besynesse,  
 That I am set in verrey sikernesse.  
 Thus oghte I blesse wel myn aventure,  
 Sith that him list me serven and honour;  
 For every wight preiseth his gentillesse.

(Ven, 1-24)

作中の“I”は Venus, つまり lady を表わし, この詩の語り手となっている。そして, 作中 “he” は, 彼女に従う courtly lover を示している。気分が沈み憂鬱なときに, 恋人の美德のひとつひとつを思い起こすことほど慰めとなることはない。それというのも, 誰ひとりとして彼の 'gentillesse' を賞讃しないものはいないから。そして彼の 'gentillesse' を思うと心が安まり, 平静を保つことができる。というのがこの詩の大意であるが, 一見して, これが courtly love の立場から書かれた詩であることは明白である。そして, ここに用いられる 'gentillesse' は, 先程すでに見た Moral Balade の場合と同様, 男らしさ, 立派な人格, 忠節, 寛大さ, 知恵, 自制心, 騎士道を重んずる心, 慎しみ深さ, 勤勉等の美德の総称として用いられているのである<sup>10)</sup>。そして, これらの美德は如何に求められるかという点, この場合には, 神にではなく, 愛する貴婦人に従うことによって, なのである。即ち, この詩では, 短詩 *Gentillesse* とは対照的に,

My lady is the verrey sours and welle  
 Of...gentillesse.  
 (Mars, 174-75)

ということが主張されているのである。

このように, 短詩 *Gentillesse* においては, 'gentillesse' は神に由来するものとしてとらえられているのに対し, 他方, *The Complaint of Venus* においては, それは恋人への献身によって獲得するものとして描かれているのである<sup>11)</sup>。いずれの場合にも 'gentillesse' は, 人として必要

とされるかすかすの美德の総称として用いられているのだが, 本質的には, 両者は性格を異にしているのである。こうした相違を踏まえて, 以後, 便宜上, キリスト教に根ざし宗教的意味を持った 'gentillesse' を 'verray gentillesse' と呼び, いまひとつの, 宮廷愛に根ざした地上的色彩の濃い 'gentillesse' を 'courtly gentillesse' と呼ぶことにする。Chaucer は, この二様の 'gentillesse' をある時には曖昧に, またある時には両者の区別を立てて用いるのである。では, 以下, この 'verray gentillesse' と 'courtly gentillesse' が, Chaucer の作品に実際どのように現われるのか, そのあり様を, 作品に即してもう少し詳しく見, 両者を比較していきたい。

### III

'Verray gentillesse' の議論が *The Wife of Bath's Tale* の中でかなりの行を費して行なわれているのは周知のことである。地位もなく, その上年老いて醜いという老婆と結婚を余儀なくされた若い騎士が, 新婚の床で泣き事を並べたのに対して, その老婆の行う反論の中に, 'gentillesse' の議論が現われる。おそらく, これは, 物語の語り手 Wife of Bath が, 学者 (clerk) であったという第五番目の夫から得た知識を存分に発揮したものと考えてよかろう<sup>12)</sup>。老婆は真の gentleman とはこのような人だと説く。

Looke who that is moost vertuous alway,  
 Pryvee and apert, and moost entendeth ay  
 To do the gentil dedes that he kan;  
 Taak hym for the grettest gentil man.  
 Crist wole we clayme of hym oure gentillesse,  
 Nat of oure eldres for hire old richesse.  
 (WBT, 1113-18)

要約すると, ここに説かれているのは次の三点である。即ち, (1) 真の gentleman とは, 裏表なく常に善行に励む人である。(2) 'Gentillesse' は, キリストに学ぶべきものである。(3) 'Gentillesse' は, 世襲財産とは無関係である。この三点を軸に, 老婆は 'verray gentillesse' を繰り返し説くわけだが, たとえば, (1) に関しては, 火の, 人が見ている前でも, そうでなくとも美しく燃焼する性質を喩えとして持ち出すのであるし (WBT, 1139-45), (2) については, Dante からの引用を含めて<sup>13)</sup>, 三度まで言及される。

Thy gentillesse cometh for God allone.  
 Thanne comth oure verray gentillesse of grace;

It was no thyng biquethe us with oure place.  
(*WBT*, 1162-64)

また、(3)については、貧困から高い貴族の位にのぼった Tullius Hostilius が絶讃され、貧しきことが讃えられる。老婆は、“The hye God, on whom that we bileeve, / In wilful povert chees to lyve his lyf;” (*WBT*, 1178-79)と指摘し、貧困を “glad povert” (*WBT*, 1183)あるいは “hateful good” (*WBT*, 1195)と呼び、

Povert is this, although it seme alenge,  
Possessioun that no wight wol chalenge.  
Povert ful ofte, whan a man is lowe,  
Maketh his God and eek hymself to knowe.  
Povert a spectacle is, as thynketh me,  
Thurgh which he may his verray freendes see.  
(*WBT*, 1199-1204)

と清貧の効用を説くのである。ここで彼女の論理を支えているのは、明らかに、“he that noight hath, ne coveiteith have, / Is riche.” (*WBT*, 1189-90)というキリスト教的逆説<sup>14)</sup>なのである。このように老婆の議論は、キリスト教と深く結び付いた ‘verray gentilesse’ の特徴の一端を浮き彫りにしたものとと言える。

‘Verray gentilesse’ は、別の作品のいくつかの箇所にも描かれているのだが、特に、*The Parson's Tale* におけるその議論は注目に値するものである。というのは、Canterbury 大聖堂への巡礼達の中でも、Parson は理想的人物と目され<sup>15)</sup>、われわれに中世社会の人間の真の生き方を語ってくれると考えられるからである。

Parson は、まず、神の本質が ‘gentilesse’ であることを説く。

...God of his endeless goodnesse hath set hem [ i.e. men] in heigh estaat, or yeven hem wit, strengthe of body, heele, beautee, prosperitee, / and boghte hem fro the deeth with herte-blood, that they so unkyndely, agayns his gentilesse, quiten hym so vileynsly to slaughtre of hir owene soules.  
(*ParsT*, 153-54)

この意味で、地上の衆生はすべてが罪人である。どんな人もキリストの ‘gentilesse’ には遠く及ばないのである。だから人が己れの gentility を誇るのには愚かなことである。肉体の健康とか美とか、生まれがよいとか、頭脳

が明析であるとか、Chaucer はこれらも ‘gentilesse’ と呼ぶことがあるのであるが、こういったものは、神がお与えになった幸せであり、また、偶然の賜物ではないか、というのである。逆に、肉体上、物質上の ‘gentilesse’ は、魂の真の ‘gentilesse’ を奪ってしまうものであるかも知れない。だが、ひとつだけ賞讃される価値のある ‘gentrie’ (= gentility)がある、と Parson は説教を進めて行く。

...o manere gentrie is for to preise, that apparailleth mannes corage with vertues and moralitees, and maketh hym Cristes child.  
(*ParsT*, 461)

このように努める人には、‘gentilesse’ の徴 (generale signes)が表われる、と Parson は語る。この徴とは、礼儀正しく (curteisye)、心清らかで (clennesse)、心が寛く (liberal)、かつ人に親切 (benigne)であることである。そして、さらに、彼は Seneca の言葉を援用して<sup>16)</sup>、柔和であること (debonairetee)や同情 (pitee)の重要性をも説くのである。清貧の Parson は、かくの如く、神に根ざした ‘gentilesse’ の必要を力説するのである。

さて、*Troilus and Criseyde* は、‘courtly gentilesse’ の典型的な例を提供している。パラディオン祭の庭で、恋する knight や squire に冷笑と愚弄を与えた Troilus は、God of Love の逆鱗に触れ、喪服姿の Criseyde を一目見るや恋に陥り、その恋の苦悩を通して、傲慢な性格を一変させるのである。

...in the town his manere tho forth ay  
Soo goodly was, and gat hym so in grace,  
That ecch hym loved that lokod on his face.  
For he bicom the frendlieste wight,  
The gentilest, and ek the mooste fre,  
The thriftiest and oon the beste knyght,  
That in his tyme was or myghte be.  
Dede were his japes and his cruelte,  
His heighe port and his manere estraunge,  
And ecch of tho gan for a vertu change.  
(*Tr*, Bk I, 1076-85)

Criseyde への愛、即ち神への愛ではなく、地上的愛 (secular love) を通して得られた ‘gentilesse’ である。こうして、傲慢なところがなくなって、Criseyde にとって如何なる点においても欠点のない恋人となった Troilus は、ついには、Criseyde によって「優しきの源」(sours

of gentilesse) (*Tr*, Bk VI, 1590-91)と呼ばれるに至るのである。このような、男女の愛を通して得られる 'gentilesse' が、Andreas Capellanus が *The Art of Courty Love* の中で述べているところの、「愛から引き出されるのでなければ、善良かつ礼儀正しい行ないはあり得ない。それゆえ、愛こそあらゆる善の源泉である」<sup>17)</sup> という愛の根本原理に則って描かれているのは言うまでもないことである。Troilus の物語の筆をとる Chaucer 自身が、地の文で、

...for every wyght, I gesse,  
That loveth wel, meneth but gentilesse.  
(*Tr*. Bk III, 1147-48)

と説明を加えている事実をみても、courtly love と 'gentilesse' との関係が強く意識されていると考えざるを得ないのである。では、一体、宮廷愛の世界が描き出す理想的人物、gentleman とは如何なる人物なのであろうか。

「宮廷愛は、その信奉者にとって、高貴な生活を送るための最も重要な要素であり、それは、また、あらゆる貴族的美德の源泉であった」<sup>18)</sup> と Sidney Painter は *French Chivalry* の中で書いているが、恐らく中世の人々、殊に Chaucer の audience であった宮廷人に最も親しくこの courtly love を説いた書は、Guillaume de Lorris の手になる *Le Roman de la Rose* の前篇であった。若き Chaucer もこの書の虜となったとみえて、*The Romaunt of the Rose* として、中世英語への部分訳すら試みている。'Courtly gentilesse' を理解する上で、この書に描かれる 'gentilesse' を検討することは、あなたがち無益なことではあるまい。

Chaucer の *The Romaunt of the Rose* は三つの部分 (fragments) から成っており、Fragment A では、宮廷人が何を徳として求め、また、何を悪として斥けるべきかが、allegory によって示されている。該当する箇所の極く大ざっぱな梗概はこうである。

詩人が小川に沿って歩いて行くと庭園に至る。それは高い胸壁に取り囲まれていて、その外側には、'Hate,' 'Felonye,' 'Vilanye,' 'Coveitise,' 'Avarice,' 'Enyye,' 'Sorowe,' 'Elde,' 'Pope-Holy,' そして 'Poverté' の絵姿が描かれている。門番の乙女 'Yedelnesse' が門を開けて詩人を招じ入れる。庭の主人は 'Myrthe' で、彼と共に lady 'Gladnesse' がいる。Lady 'Curtesie' が、折から行なわれている踊りの輪に詩人を参加させる。God of love が 'Beau-

te' の手をとる踊りの輪には、'Richesse,' 'Fraunchise,' 'Curtesye,' そして 'Youthe' がいる。(後略)  
(*Rom*, Fragment A)

以上の梗概からわかるように、胸壁に描かれている、憎悪、裏切り、粗野、強欲、貧欲、嫉妬、悲哀、老齢、偽善、貧乏は明らかに宮廷文化とは背馳する資質、即ち vices ということになるし、反対に、愛神の庭の中に描かれる無為、歓楽、快楽、礼節、美、富、寛大、率直、青春は宮廷文化に好ましい資質、即ち、virtues ということになる。このような徳目を求め、悪を斥ける人こそ、理想的宮廷人、gentleman ということになるわけである。

Fragment B では<sup>19)</sup>、さらに、愛神が詩人に courtly lover として守らなければならないことを具体的に教授する。文脈に従って愛神の命令のいくつかを拾い上げてみよう。まず、粗野であることが一番いけない、として愛神は、

Thisse vilayns arn withouten pitee,  
Frendshipe, love, and all bounte.  
(*Rom*, Frag B, 2183-84)

と教える。Churls に欠けるものが、逆に、gentleman には必須の資質なのである。また、人と如何に親しく交わるか、ということも問題となる。

...be wise and aqueyntable,  
Goodly of word, and resonable  
Bothe to lesse and eke to mare.  
(*Rom*, Frag B, 2213-15)

さらに、'courtly gentilesse' の重要な特質であるが、

...all wymmen serve and preise,  
And to thy power her honour reise.  
(*Rom*, Frag B, 2229-30)

と愛神は、女性に対する特別の態度を強調するのである。この後、愛神は傲慢を戒め、身だしなみと清潔のことに触れる。

Mayntene thysilf aftir thi rent,  
Of robe and eke of garnement  
(*Rom*, Frag B, 2255-56)

Of shon and bootes, newe and faire,

Loke at the leest thou have a paire.  
(*Rom*, Frag B, 2265-66)

Thy nailes blak if thou maist see,  
Voide it away delyverly,  
And kembe thyn heed right jolily.  
(*Rom*, Frag B, 2282-84)

そして、さらに、愛神は、恋する者には、陽気であることが絶対的必要条件だとして、楽器の演奏や踊りの技を磨くことを薦めるのである。CTの *General Prologue* で恋する男(lover)として紹介される Squire が、「ひねもす歌を口ずさみ、笛を吹いていた」(Syngyng he was, or floytyng, al the day.) (*Gen Prol*, 91)という事実を思い起こさせる一節である。

#### IV

以上、Chaucer の 'gentillesse' の二つの面——キリスト教に根ざした 'verray gentillesse' の側面と courtly love に根ざした 'courtly gentillesse' の側面——を見て来たわけであるが、両者を比較検討するという議論の性質上、やや両者の間に濃く線を引すぎた嫌いのあることを認めないわけにはいかない。Chaucer の多くの用例の中には、実際は、どちらとも判別のつかないもの、もしくは両者が融合しているという印象を与える用例も少なくないのである。それはまた必ずしも 'gentillesse' という言葉だけに限ったものではない。しかし、この語の根本のところには、確かにこれまで見て来たような二つの面が存在すると思われる。では、このような 'gentillesse' の二つの側面を、Chaucer は如何に見ていたのだろうか。

Chaucer の同時代の宮廷詩人 John Gower は *Vox clamantis* の中で、courtly love を、「拳句のはては決して愚行をもたらすだけ」<sup>20)</sup>のものとして、手厳しく批難する立場をとった。しかし、Chaucer は、Gower の如く、きっぱり courtly love に否定的態度をとるようなことをしない。それどころか、Troilus と Criseyde の愛を描く際の好意と情熱あふれる筆致は、Chaucer が如何に地上的愛に理解をもち、魅せられていたかを示すものである。しかし、それでもなおかつ、最終的な生活の価値規準は、中世紀の教養豊かな詩人として、地上生活の善悪の規準を、単純に、しかも躍起になってキリスト教的徳目の関連の許に四六時中考えるのではなくとも、やはり、キリスト教の上に置いていたと思われるのである。Chaucer は作者の立場から、Troilus を裏切った Criseyde を万人のそしりから弁護してやろうと言葉を尽す

のである。しかし、彼らの愛の結末が示すように、地上の愛、男女の愛は、所詮、はかないものでしかなかった。はかない故に美しく人の心を魅了するものであるかも知れない。だが、最終的には、キリスト教に裏付けされた 'verray gentillesse' に目を向けよ、と Chaucer は audience たる宮廷人に語りかけているのである。また、そうするのが節度であり、Chaucer は、たとえふざけることがあっても、そういう節度は最終的に大切にしていたのであろう。Chaucer が、CT を理想的巡礼である Parson の告解の秘跡をすすめる大説教でしめくり<sup>21)</sup>、この中で 'verray gentillesse' を執拗に説いているのは、決して偶然のことではないのである。

#### 注

\* 本稿は、1980年10月19日、同志社大学で催された中世英文学研究会第三十二回例会において発表したものに基く。

1. Chaucer は、'gentle' 同様 'noble' も多用しているが、当時は両者がほぼ同意語として用いられた。OED の 'gentle' の項に、"originally used synonymously with noble" とある。
2. Chaucer からの引用はすべて、F. N. Robinson (ed.), *The Works of Geoffrey Chaucer* (London: Oxford University Press, 1974) に拠った。なお、本稿中使用した Chaucer 作品の略号はすべてこの版の略号表 (p. 647) に拠った。
3. Kean 女史は、CT の "major themes" として 'Fortune and Free Will,' 'Marriage,' 'Nobleness of Man' の三点を上げている。(P. M. Kean, *Chaucer and the Making of English Poetry, Volume II, The Art of Narrative* [London and Boston: Routledge & Kegan Paul, 1972] pp. 165-85.)
4. 例えば、'gentle' について言えば、「身分の高い」「貴族出身の」「育ちのよい」「物腰のやわらかな」「優雅な」「性格の高貴な」「温和な」「やさしい」「姿の美しい」「魅力的な」「(チェスやダンス等の技に) すぐれた」等の意味が考えられる。
5. Cf. Norman Blake, *The English Language in Medieval Literature* (London: Dent, 1977). 同書の第4章で、Blake は、"words in medieval English lacked the same clear-cut significance or connotative associations of modern words." (p.99) と述べ、"key-word" より repetition などの "pattern" の重要であったことを強調している。
6. "... a free translation or adaptation of three French ballads ... Chaucer's version of the first is

- hardly a translation at all.” (F. N. Robinson, *op. cit.*, pp. 862-63.)
7. Cf. “... possibly the ‘fader of gentilesse’ is Adam before the Fall and the ‘first fader in magestee’ is Christ after the Resurrection; or perhaps the phrase is intentionally ambiguous, referring to both.” (Donald R. Howard, *The Idea of the Canterbury Tales* [ London: University of California Press, 1976], p. 129)
- “A perfectly clear reading can be obtained if we take ‘the first stork, fader of gentilesse’ to refer not to Christ but rather to the first race of nobles, which is the ‘fader of gentilesse’ in the same way that Chaucer is the father of English poetry.” (Dorothy Bethurum [ ed. ], *Critical Approaches to Medieval Literature* [ New York: Columbia University Press, 1967], p. 152)
8. W. W. Skeat (ed.), *The Works of Geoffrey Chaucer* (Oxford: At the Clarendon Press, 1972), Vol. VII, p. 239.
9. Nevill Coghill, “Chaucer’s Idea of What is Noble,” (“Presidential Address, 1971”; London: English Association, 1971), p. 13.
10. Otes de Granson の原文では、各 stanga の最後の二行は次のようになっている。  
 “Ne je ne truis nul homme que me blasme, / Car chascun a joye de li loer.” (W. W. Skeat, *op. cit.*, Vol. I, p. 400)  
 これで見ると、Chaucer の *Ven* の中で用いられる ‘gentilesse’ の語は明らかに彼独自の diction と言える。
11. Cf. “... at one pole the word may be associated with the manners of court and castle as an aspect of *curteise* and at the opposite pole be more philosophically defined as *verray gentillesse*, true nobility, identified as moral virtue derived from the Divine Idea.” (Alan T. Gaylord, “‘Gentilesse’ in Chaucer’s ‘Troilus,’” *Studies in Philology*, LXI [1964], p. 21.)
12. *Wife of Bath* の夫 Jankyn は、妻の非行に際したたびたび説教したく (“... he often tymes wolde preche.”) (*WB Prol*, 641) とある。
13. Cf. “Ful selde up riseth by his branches smale Prowesse of man, for God, of his goodness, Wole that of hym we clayme oure gentilesse.” (*WBT*, 1128-30)  
 というのがその件で、Dante の *Purgatorio*, VII, 121-23 を踏まえている。Chaucer の ‘verray gentilesse’ の議論は Boethius, *De Consolatione Philosophiae* や Dante, *Convivio* 等に負うところ大であると言われるが、こうした影響関係やこの時代において Chaucer が ‘verray gentilesse’ を繰り返し作品の中で説いたことの意味については、稿を改めて論ずるつもりである。
14. Chaucer のこのあたりの議論は、Vincent of Beauvais, *Speculus Historiale*, Bk X, ch. 71 から借用されたものだと言われる。(Gloria Cigman [ ed. ], *The Wife of Bath’s Prologue and Tale and the Clerk’s Prologue and Tale from the Canterbury Tales* [ London: University of London Press, 1975], p. 173.)
15. Huppé 教授は、*CT* における四人の理想的人物として、Knight, Clerk, Plowman, そしてこの Parson を上げ、“Like the Knight and the Clerk he lives up to his high Christian ideal.” と言っている。(Bernard F. Huppé, *A Reading of the Canterbury Tales* [ New York: University of New York, 1967], p. 39)
16. 異教的伝統に属しはするが、しばしば中世キリスト教の説教の example の中にとり入れられた。
17. “... no one does a good or courteous deed in the world unless it is derived from the fount of love. Love will therefore be the origin and cause of all good ...” (Andreas Capellanus, *The Art of Courtly Love*, trans. John Jay Parry [New York: Ungar, 1970], p. 40.)
18. “Courtly love was to its adherents the most vital element of noble life--the sources of noble virtues.” (Sidney Painter, *French Chivalry* [Baltimore: John Hopkins, 1961], p. 96.)
19. Fragment B の翻訳が Chaucer の手になるものであるかどうかは、*versification* や *style* の点では問題のあるところであるが、すくなくとも若き Chaucer の愛読書として *Le Roman de la Rose* があったことを前提として、文意中心に詩行を追っていくことにする。
20. Cf. “Now tell me ... : what honor shall a conqueror have if a woman’s love can conquer him? ... The end will bring nothing but inevitable folly upon the man for whom Venus initially leads the way to arms.” (Robert P. Miller [ed], *Chaucer: Sources and Backgrounds* [New York: Oxford University Press, 1977], p. 194.)
21. *CT* のしめくりとしての *Pars T* の重要性については、斎藤勇著、『中世のイギリス文学——聖書との接点を求めて』（東京：南雲堂、1978年）、245-50頁。  
 (受理 昭和56年1月16日)